

東洋文化講座・シリーズ「アジアの未知への挑戦——人・モノ・イメージをめぐる」講演録

第八五回 東洋文化講座（二〇一五年一月二日）

私が朝鮮に向かいはじめたころ

宮田 節子

「皆さん、こんばんは。私をご紹介いただきました宮田節子でございます。どうかよろしくお願いいたします。」

私は、中学高校が一貫した女子だけの学校に通い、学校に行く以上は多少は授業を受けなきゃいけないんじゃないか、という程度には勉強しておりました。それで早稲田に入ったわけです。

私はずっと中国史を勉強したかったです。それは一九四九年の一〇月一日に中華人民共和国ができました。あの列強から狙われてポロポロになっていた中国が、立派に立ち上がってきたというのは、私は何でこんなに中国が一つにまとまって、すごい国になったんだろうかというので、本当は最初は中国史をやろうと思って、それで早稲田

大学の史学科の東洋史に入りました。そうするとやっぱり早稲田はたくさん古い先生がいらっしゃると思って、「今の中国は一〇年ともたない」と。みんなが「ワー」とか何とか抗議の声をあげたんですね。そうしたら「もしもつたらば、僕が早稲田中を逆立ちして歩いてもいい」とはつきりおっしゃったんですね。だから私、一〇年待っていて、確かにまだ潰れなかったから、その先生のところに行つて、「先生、逆立ちしてください」と言おうと思つたんですけども、あんなにお年寄りなのに逆立ちでもして死んじゃったりしたら、私も後が気持ち悪いんで黙っていたというわけなんですけれども。

ちょうど私が早稲田に入ったのは一九五四年でしたか。

一九四五年に日本が負けたわけですから、戦後まだ間もないころ、間もなくもないですけれども、まだすぐ焼け跡なんかが残っているような状態で、そして早稲田の学生の中には復員してきた人もおりました。軍服かなんか変なおバーミたいなのを着ている人が、まだたくさんいらっしゃいました。それで中には、自分が本当は働いて両親を養わなきゃいけないのに、自分が東京に出てきちゃっているから、だから一生懸命アルバイトして、「親にお金を送るんだ」なんていう人もいました。

そういうときに私は早稲田大学に入りまして、そのころは一九四九年に中華人民共和国が成立したんですね。それでたしかまだテレビはなかったと思いますけれども、中華人民共和国が成立したということを、毛沢東だか周恩来だか、誰かがラジオで言ったことを何回も何回も流して、それが私の耳に残っていて、「ああ、どうしてあの中国がこういうふうな国になったのか、私もぜひ大学に行つて、中国近代史を勉強してみたいもんだ」と思つて、それで早稲田大学の史学科の東洋史に入学いたしました。

そして早稲田に入ると同時に中国研究会というのがありました。昔は支那研究会と言つていたようです。支那研と書いたような紙が残つておりました。でも私たちが入った頃には中国研究会で、略して中研と言つておりました。

それでその中研に入ったんですけども、中研には歴史

部会とか哲学部会とか、それから文学部会とか、それから語学の研究会とかいろいろあつたんですね。語学の研究会というのは先輩のちよつとできる方が下級生を教えるというふうなことで、私は大学の思い出よりも、研究会の、中研の思い出のほうがたくさんあります。秋に早稲田祭というのがあるんですけども、そのときに初めて学生として参加したら、全然おもしろくないんですね。ともかく変なグラフなんか書いてあつて、「どこどこの国の生産はどうなっている」とか、字でばかり説明している。だから私は次の年には「何か食べ物を売つたらどうか」というのを提案しました。それでギョーザがいいんじゃないかと思つて、学校のほうでも食べ物のことは禁止してないと言ふんです。ですから私が提案して中研ではギョーザを売りました。そうするとこれがすごく売れたんですね。ほかに何も食べ物なんか売っていませんから。それですごく売れてもうかります。それで中研の本箱ともう一つ大きな物を買つたのを覚えています。昨年でしたか、ちよつと早稲田に用があつて行つて、中研の部室をのぞいてみたらその本箱がまだちゃんとあつて、「ああ、私が一つ早稲田に残してきた思い出だな」と思つたんですけれども。そんなことがあつたわけです。そういうふうには中国研究会で非常に、ギョーザを売つたりなんかして。その後、私の残してきたものは食べ物売ることだけが、すごく引き継がれ

まして、去年早稲田にちよつと用があつて早稲田祭のときに行つたらば、びつしり食べ物屋ばっかりなんです。展示会なんか全然やつてないから、何かいいことをしたんだか悪いことをしたんだか、わかんなくなつたんですけれども。ともかく最初の提案者です、私が。

それでもともと私は中国史を勉強したために大学に入ったのに、どうして卒業論文は朝鮮史で書くことになつて卒業したのか、というのがきょうの私の話の主題になるかと思うんです。私は、それは一部の中国研究者がちよつと左翼大国主義的などころがあつたんです。そういうことに対して、ちよつと批判があつたんです。自分の対象とする人や、自分が研究対象とする国が大きいと、その人は何も別に偉くもないのに、自分まで大国になつたり、偉い人になつたりするような気分になるのかなと思つているんですけれども、ちよつと早稲田にもそういうふうな先生がいらつしやつたんです。

更に実を言いますと、私の身近なところに二人の在日朝鮮人がいたんです。一人は中研の大先輩、それからもう一人はクラスメート、二人の在日朝鮮人がいたんです。しかしそのころ彼らはみんな日本名を名乗つて日本人的な、何しろ日本人より日本人的だつたんです。だからどこか自分には、心にそういうところがあると、一層そういうふうになるのか。例えば流行歌だと伊那の勘太郎なんてあんまり

皆さんも知らない方が多いんじゃないかと思うんですけれども、そういつたような流行歌を歌うとか、それから日本の山の高さを正確に覚えていて、「どこの山は何千何百何メートル」というふうなことを言つたりなんかして、得意がつたりしていた。だから私はつきり、私ほもとよりのこと、私の友人たちもみんな彼らは日本人だとばかり思つていたんです。

ところが彼のほうはやはりそういうふうな悩みを抱えていたんです。それである日研究会の席上で、終つてみんなが立ち上がろうとするときに、彼は「ちよつとみんな待つてくれないか」と。「僕に少し時間をくれ」というふうに言つたんです。みんなは「何？」というふうな感じで、もう一回座りなおしたんです。そうするといつも雄弁な彼が非常に言いにくそうに、「実は、長い間僕は皆さんにうそをついてきた。僕は本当は朝鮮人なんだ。けれども皆さんが僕のことを日本人だと思つてつき合つていることを十分に知りながら、少しも自分は朝鮮人だということ皆さんに言ったことはなかった。だから結果的にはうそをついたことになる。だからこれからは自分が朝鮮人だということ を明らかにする。」という。そして自分の本名である姜徳相という名前前で呼んでくれ、といいました。それが姜徳相、日本よみにすると「キョウトクソウ」なんですけれども、朝鮮語読みすると「カンドクサン」。だから彼はシンノ

ウサトシから、キョウトクソウになる、更にカンドクサン。私なんかはわかるんですけども、うちの母なんかですとちよつとわからないんですよ。彼も電話なんかくれたときに、「昔、シンノウって言っていた者ですけども」とかって、ちよつと言つてくれればいいんですけども、「キョウだ、キョウだ」と言うから、「何か変な人からおまえ電話かかってきたよ。幾ら名前を聞いてもキョウだ、キョウだと言うのよ」って、例えばそういうふうなことになってしまふんですけども。ともかく彼はやつぱり自分の……。最初のうちは父親が朝鮮人だけでも、母親は日本人というふうに言っていたんですね。今や、「れっきとした自分は朝鮮人だ」なんて威張っていますけれども、そういうふうにすぐくやはり言いにくかったようなんです。

それはすぐ朝鮮人だということで差別された。私はすぐく身近につき合っていたんですけども、全然彼が差別されているなんて知らなかったんです。だから「一体どういうことで差別されたの？」と言ったら、大体銀行はお金を貸してくれない。それから公営住宅なんかには入れない。それから在日朝鮮人だということがわかると大企業には絶対就職できない。今はどうか知りません。それは私がまだ早稲田に行っていたころの話で、だんだんそういうったものも少しづつ消えてきているように思いますけれども。そういうふうな公的なものからは絶対排除されている。そ

れから選挙権は全くない。日本人と同じように税金を払っているのに、そういうった権利は一切奪われていると云うんですね。それで、そういうことで。彼は「本当は自分は姜徳相という名前であれからは姜さんと言つてくれ」というふうに言われたんですけど。私はそれまではシンノウさん、シンノウさんと言つていて、人の名前というのはその人のイメージと分かちがたく結びついているから、そういうふうには言われたつて急に「きょうさん」だの、「あしたさん」だのつて言えなくなつちやうわけですよ。でもそういうふうにもできるだけ彼の期待に沿うように、一生懸命努力をしたわけです。

それで私はだから朝鮮人だからといって、私は最初は中国近代史をやっていましたから、むしろ中国人というところを近感こそ抱くけど、何も差別ということについてはあんまり考えていなかったんですけども。だから「だつてそんなに日本人つて朝鮮人のことを差別するかしら」つて言ったら、彼は「とんでもない」と。「学校ではそうかもしれないけど、一旦社会に出たらすごい差別があるんだ」と、こういうふうに言うんですよ。それで銀行はお金を貸さない。それから税金はきちんととるのに、公営のもの、例えば公営住宅みたいなものには入れない。そういうふうなすぐく差別が非常にあるんだということを言っていました。だから自分たちは仕方がないから朝鮮銀行というのをつ

くつて、そこに資金を集めて商売なんかやっているんだというふうなことを話していたんですね。そして彼なんかは特に目立つほうだからと思うんですけども、近くの交番の巡査なんていうのは、彼が朝鮮人だということを知りながらいつも登録証を持っているんですね。その登録証は常時持っていないきやいけないことになっているんですけども、お風呂なんか、銭湯なんかに行くときはそれを置いていくと。そうするとわざわざ近くの駐在のお巡りさんなんか「ちょっと登録証を見せろ」と言われて、登録証不携帯で罰せられたことが、自分は本当にあつたと言うんですね。だからそういうふうなこともされることがあるんだよと言っておりました。

私自身は全くそういうふうには、学校ではそういうことは本当にあんまりなかったように思うんですね。だから私は本当に近くにいなながら全然気がつきませんでした。しかしあるときに朝鮮学校が閉鎖されるといふ問題が起こったんです。それは恐らく区立か何かの、それはちょっとはつきり調べていないからわからないんですけども、今ある朝鮮の学校は在日朝鮮人たちがお金を出してやっているんですから、そんな閉鎖するなんていうことはないと思うんですけども、私が学校に行っているところには朝鮮学校が閉鎖されるといふ問題が起こったんです。

それで私の研究会にも反対の署名簿が回ってきたんです

ね。私も一生懸命署名活動をした。そして早稲田で最も進歩的だと言われる中国関係の先生のところに「ひとつ先生、署名お願いします」と言って持っていたんですね。そうしたら先生はきちつとその文章をお読みになって、「うーん」なんてお考えになって、「宮田君、君、朝鮮人につき合っているけれども、朝鮮人はいろんな人がいるから気をつけようがいいよ」と言って、署名してくださいさなかったんですね。これは割合にはつきりと左の人にちよつとそういう人が多いいんですね。何か朝鮮人の中には権力の手先みたいな、そういうふうにはもちろんおっしゃいませぬけれども、「いろんな人がいるから、ともかく君は気をつけなさい」とこういうふうには注意されたんですね。私は「先生は署名してくださいさなかったわ」と言って持って帰ると、そばにいたカンドクサン、猛烈に怒ったんですね。「あのエセ進歩主義者め」とか何とかがつて言つて。だから「何も先生には先生のお考えがあつて署名しなかつたんだろうから、そんなに怒ることもないんじゃないの？」つて後で彼にはそういうふうには言つたんです。そうしたら彼も「それはそうだ」と。本当に差別されたのか、それとも自分の力が至らないのにそういうふうには言われたのかというところが、何かどうも在日の人、私は在日朝鮮の方にはつきり言っているんですけども、自分自身の責任なのに、それを何かすべて朝鮮人差別のせいにするというのは、また

それも朝鮮人にとつてはマイナスの点じゃないかと思うということは、ほかの朝鮮の方にもはつきりとそれは言っているんですね。「やつぱり自分の責任で至らないところは至らないっていうことをきちつと認めなきゃいけないんじゃないの?」とカンドクサンなんかにも親しくしていませんから、そういうことも何でも注意することもちゃんとやっているつもりなんです。

それでいよいよ私も一九五七年、八年の三月に卒業しましたから大学を。七年になりますと卒業論文のテーマを出せというふうなことになったんです。私は迷わずにちよつと朝鮮史をかじつていたもんですから、ここからもう離れないようにというんで、卒論で「三一運動」というのを出したんですね。そうしたら誰も知らないですよ。皆さんはもちろんど存じだろうと思うんですけども、一九一九年に起こつた日本の植民地支配に対する全民族を挙げたすごい激しい戦いだったんですけども。これはちよつと私が三一運動について古本屋で買ったときに、その後ろにこういう地図がついていたんですね。これは三一運動のときに蜂起した場所なんですね。全土を挙げてと言つてもいいほどの激しい戦いだったんです。これが三月一日から四月の中旬末以後、「騒動ハアトヲタテリ」というふうに総督府は言っているんですけども、特に日本はまだ帝国主義になり立てというか、だから世界的にデビューしたばっか

りですから、ほかの国に植民地がこれだけの激しい暴動を起こして、そしてそれに手こずつているということは非常にまずいことなんですね。だからできるだけ報道管制を引いて、これは軍隊が直接日本から送り込んでいつて制圧しているんですけども、その軍隊も浦賀とかいろんな港から、朝鮮のいろんな港に上げて弾圧せよというふうなことを、原敬日記は本当に四月になると朝鮮のことで頭がいっぱいになってくるような激しい戦いだったんですけども。そういう論文を提出したんですね。

一対一で、自分の論文をどういうふうに、卒業論文をどういうふうに書くかということと先生と話し合うということがあつたんですね。そうすると、先生は早稲田には朝鮮史をやっている先生はいらっしゃいませんので、私が「三一運動」と書いて出したならば、その先生は中国古代史が専門だったんですけども、「君、三一運動つて何だい?」つてこういうふうにおっしゃるんですね。ですから「先生、昔、朝鮮で万歳事件というのがあつたと思うんですけども」と言つたら、先生は遠くのほうを思い出すような顔をなさつて、「ああ、そういえば昔あつたね。あれ万歳、万歳とか言つて、朝鮮人が叫んで歩いたつてやつだろう。あれが三一運動つて言うの?」へー。しつかりやりましたま。大体先生は「しつかりやりましたま」と言うに決まっているんですよ。「いいかげんに書きなさい」なんて言つたら

先生としての役割は果たせないことになりますから。それで私にも「しつかり書きたまえ」と言ってくださったんですね。

それで私はちよつと植民地と本国との関係についてこのころ全く知らなかったんですね。私は植民地で大きな三一運動のような全土を挙げて、この地図は、極秘の日本の陸軍か何かがつくった地図なんですけれども、たまたま私が買った本の中にこの地図が入っていたんですけれども、極秘の地図なんです。それで三月一日に起こって、四月末中旬ぐらいこういうふうに全土がすさまじい戦いだっただすね。それで書いたものなんか読みますと、本当にまともにも読めない程度の激しい弾圧なんかしているんですね。軍隊を二個師団、それも通常の編成より多くして送り込んでいるんですね。そしてやつとおさめているんですね。そういうことは私ももちろん全然知りませんでした。日本では恐らく、朝鮮人がそういうふうに激しい戦いなんかをやったということは、ほとんど皆さんご存じないんじゃないかと思うんですね。

私は最初は本国と植民地というのはもつと密接な関係でもって、ズラーツと日本のどこかに行くと、植民地関係の朝鮮総督府から送ってきた文書みたいなものがズラーツと、どこか日本の場所にはそろっているんだらうというふうなイメージを持っていたんですね。ところが全くそう

じゃないということがだんだんわかってきました。台湾は台湾のほうで独自にやっている。朝鮮は朝鮮のほうで、朝鮮総督は確かに日本から送るわけですけども、朝鮮にいる官僚というのはずつと大体朝鮮にいるんですね。土着型の官僚。それから内地志向型の官僚、これは総督と一緒に行って、総督と一緒に引き揚げてくる。だから例えばそのいい例が南次郎の懐刀と言われた、塩原時三郎という人がいるんですけども、この人が典型的な内地志向型官僚なんです。だからその人がすごく厳しい皇民化政策なんかをやるんですね。創氏改名とか、名前を全部日本風に変えさせるとか何とかということをやつて、そしてサーツと帰つてきちゃう。土着型官僚というのはやはりどうしても朝鮮に骨を埋めようという覚悟で支配の緒に当たっている人もいるわけなんです。そういう方はずつと大学を出てからほとんど、敗戦で帰ってくるまで朝鮮にいる。そういう官僚の間にはやはり朝鮮に対する考え方について大変な違いがあったと思うんですね。だからこれからは朝鮮総督府というと、何か私たちは権力者というんで同じに見ちゃうんですね。その内部におけるいろんな矛盾というものも考慮に入れないと私はいけないんじゃないかなと。まだ本当に朝鮮に対する研究というのはこのごろ随分、皆さん、やるようにはなつてはきているんですけども、まだまだこれからだということが非常にたくさんある

んで、そういった点もこれからの研究の中では視野に入れていかないといけないんじゃないかなと、これは私も含めてそういうふうなことが言えると思うんですね。

それで卒論のことに話を戻しますと、どこに行っても全く資料がないんですね。私は本当に困っちゃって、「何で、中国近代史にしてあげばよかったのに」と思って、「じゃあ、どうして私が朝鮮をやったのかということでも論文に書いて、うまく何となくごまかしちゃおうかな」と思ったんですね。そのときに早稲田の東洋史の清水泰司先生という、東洋史の先生に会ったんですね。この先生は全く影の薄い先生でもって、よきにつけあしきにつけ、学生の口から一つも話題に上らない先生だったんですね。その先生が、私がちょうど四年生の夏休みに入る前にキャンパスでバツタリ会ったんですね。そのときに「宮田君」って言ったから私はグキツとしたんです。どうしてグキツとしたかというと、その先生の授業のときには出席をとるといつもこっそり抜け出しちゃって、何か食べに行ったりしちゃっていったもんですから、「あれが見つかったのかな」と思ったんです、一瞬。そうしたらそうじゃなくて、「君、朝鮮のことやるんだって？」ってその先生がおっしゃって、私はその先生には一言も朝鮮のことをやるのか何とか言っていないのに、ご存じだったんですね。それで先生は「もし朝鮮のことをやるんだったら、丸の内に元朝鮮総督府の高官た

ちが集まっている友邦協会というのがある」と。「そこに行けば何か君の役に立つかもしれないよ」ということを教えてくださったんですね。私はその時本当に人は見かけにやらないもんだとつくづく思いました。そんな誰からも影の薄いような先生が、そんな大事なことをなんか知っているだなんて本当に思いもよらなかったんですね。

それで私は次の日早速、「丸の内」友邦協会、「その二つのキーワードだけを頼りに東京駅で降りて、丸の内のほうを一生懸命探しました。東京駅の前には皆さんご存じのように大きな丸ビルがあります。その脇にいろんなビルがあるんですけども、その入口のところにありがたいことに、そのビルの入っているネームプレートみたいなのが全部出ているんですね。どことこの何とか会社とか、何とか協会。そうすると丸ビルから二つ有楽町よりに中央日韓協会、それから友邦協会と書いたネームプレートがあったんですね。それは、四階にあるということで、私は喜び勇んでそこに駆け上っていったわけです。

そうするとその廊下の突き当たりにも、恐らくそのビルでは一番大きな部屋だと思っただけでも、三つばかりの部屋が一まとめになっていたんですね。それで私はその部屋に入ると、入ったところにどなたもいらっしやなくて、そしてその奥が会長室になっていました、その左脇のほうにちょっとこれよりはちょっと小さいんですけど

も、大きな部屋がありまして、そっちのほうで多くの人の声が聞こえたから、恐る恐る戸をあけてみた。そうしたら二つぐらいのグループに固まって何かいろいろ話しているような感じだったんですね。そして一番若い人といつてももう五〇歳か六〇歳ぐらいの方ですけれども、その方が私に「何かご用ですか」とお聞きになったから、「私は早稲田の学生で卒業論文に三一運動についてやりたいと思っておりますけれども、ここに何かその関係の資料がありますでしょうか」と伺ったんですね。そうすると「ああ、それだったら書棚の下のところにあると思うから、探してごらんなさい」と言ったときは、私は本当に天の声と思いました。というのは、幾ら探しても全くどこにもないんですね、朝鮮関係の資料というのが。それで報道管制を引いていますから、新聞だつてろくろく書いていない。

そこで探してみましたら、汚い風呂敷包みが二つばかり転がってしまって、そこには約一八〇点に及ぶ朝鮮関係の資料が入っていました。これは阪谷芳郎さんという子爵の方がご自分で集められたのを、友邦協会に寄附したんですね。そして阪谷さんの奥様は渋沢栄一の娘です。穂積先生の母親も又、渋沢栄一の娘です。今、写真でお見せするお年寄りの方、この方が渋沢栄一という名前はご存じだと思わなくても、その人のお孫さんなんです。穂積真六郎先生はお父さんとお兄さん、長男は東大法学部の教授

かなんかで、だから日本にいと全部自分の親とかお兄さんの教え子みたいなのがはびこっているわけですよ。私の頃の役人の名簿をちよつと見たことがあるんですが、ほとんどが東京帝国大学法学部というのがすごく多いんですね。朝鮮総督府も多かったですけれども。これじゃあ、私はうちのできの悪い兄貴のことをこのときぐらいありがたいと思ったことはないんですね。ともかく一〇番ぐらいで卒業しても、穂積の家の者としてはそんなものなっていない成績だと言わなくていい。大体東京帝国大学一〇番以内で卒業するとうちなんかお赤飯炊いて、私なんか入ったことないですから、そんなこともちろんわからないですけれども、お赤飯炊いて喜んでくれるんじゃないかと思うんですけれども。全然なつちやない成績だつて、穂積先生は自分でおつしゃっていました。だから日本にいるのが嫌で、朝鮮総督府に入ったんじゃないかと、これは先生はおつしゃいませんでしたけど、私はそういうふうに推測しているんです。この方が、友邦協会の理事長をやっていたらしたんですね。それで私は友邦協会にある資料でもつてい—それで阪谷芳郎さんというのは穂積先生のお母さんの妹の嫁ぎ先が阪谷さん。だから結局穂積先生の義理の叔父さんですね、阪谷芳郎さんはその人が子爵でもつてすごい膨大な朝鮮関係の資料を持っていたんですね。それで「いつか、これを君がとりに来るだろうと思つてとつておいたよ」

と言って穂積先生に手渡してくれたと、後で穂積先生から伺ったんですけれども。そのおかげで私は「三一運動について」という論文を三〇〇枚ぐらい書いて学校に提出して、卒業することができたわけなんです。

しかし私が意気揚々としたのはここまででして、私はだからさつき申し上げたように、植民地と本国の関係を非常に誤解していたんです。本国に対しては植民地のほうからジャンジャンきちつと報告が行っていたと思っていた。ところが全然そんなことじゃないんですね。それでその中央日韓協会とか友邦協会は、特別にやつぱり朝鮮に関心を持っていての方がそういうふうな資料を集めたものをそこに寄附してくれたということになって、決してどうしてそういうふうなことで、日本はもつときちんとやらなかったのかなと今にして思うわけです。そういうふうなことがあつたわけなんです。それで私はどうやら卒業することができたわけなんです。

その阪谷文書の中には、皆さんのお手元に資料が行っていましたが、ちよつと何ページかごらんいただきたいんですけれども。二ページのところに秘の、マル秘の「朝鮮騷擾経過概要」大正八年九月の陸軍省印刷とか、厳秘の「朝鮮思想運動略史」朝鮮総督府警務局保安課、配布番号が一八五号、二ページのところです。一番、表の裏のほうです。表の裏というのはおかしいですけど。二ページのところ

るなんですけど。その下のほうに三一運動の資料だったというところに書いてありますけれども。こういった全部厳秘とか極秘とか書いてある「朝鮮騷擾地巡回日誌」とかいう資料が膨大に入っていたわけなんです。それで私は卒業がやつとできました。

私が卒業できたのは全てこの友邦協会の資料のおかげだと心から感謝していましたから、卒業と同時に私は友邦協会に「おかげさまで卒業できました」と挨拶に行つたんです。そうするとこの穂積先生という方が私のことを「ちよつと」とお呼びになつたんです。そして「この友邦協会に朝鮮のことが勉強したいと言つてきたのはあなたが初めてだ」と、「実に奇特な人だ」、こういうふうに言うわけです。それで「どうですか、一緒に研究会でもやりませんか」とこうおっしゃるんですね。私は研究会というのは今まで若い同じぐらいの年の人とやるもんだとばっかり思っていて、まさかこういうふうなおじいちゃまと一緒に、偉いような人とやるなんて思つたこともなかつたんですけれども、先生のほうから「どうです？一緒にやりませんか」とおっしゃるから、私は「先生、二三人、まだほかに、朝鮮やつと一緒に勉強している人がいますから、その人と相談してご返事申し上げます」と言う、「ぜひそうしてください」ということ。それで私は友人の姜徳相、この方、在日朝鮮人。それから権寧旭さん、これはクラスメー

トでもありました。それからもう一人、東大生だった梶村秀樹さんという方、この方も一九八九年に亡くなっちゃっているのです。

何かそのくらいに、本当に少ない、数少ない研究者だから、私は本当にもつたいないと思うんですけども、お亡くなりになってしまっているんですけども。その方たちと相談して、そしてじゃあ、この際、せっかく朝鮮総督府の高官の人がそういうふうに言ってくれるんだつたらば、この際、徹底的に資料を集めようじゃないかと。論文は資料さえあればいつでも書けるんだということで、私たちは穂積先生にお目にかかって、徹底的に資料を集めようという事になったわけです。それで、皆さんにお配りします裏のほうにこの人たちがまとめた横になっている資料があるんですけども。

録音記録を業者に出しているんですけども、話声とか、質疑応答なんか誰がしゃべっているかわからないから、最終的には私が監修みたいのをしているんですけど。それでこういうふうにしてテープは四一八巻とっているんです。皆さんに配っている朝鮮近代史料研究会が出している研究集成というのがお手許にあるかと思うんですけども。

その録音、録音と書いてあるのは、全部外部から来た偉い先生方だけで、私たちのは何もとることがないと。その当時は本当にみんなお金に困っていたんですね。それだ

からテープもできるだけ節約しようというので、全部中古のテープを買っています。今、私はそれを起こすのもう一回聞いているんですけども、ちょっとテープをとめると音楽がなったり、漫才か何かが始まったりというふうにならなくて、全部中古のテープでやっているんですけど。それでここに書いてあります、録音、録音というのでもできるだけ外部から来た先生方の録音をどうしようということで、私たちの話なんというのには録音するにも値しないということで、全然研究会のメンバーのはとらないようにしていたわけです。それでそういうふうにしてとったのが四一八巻あります、テープにして。だから一時間テープとすれば四一八時間ということになるのかしらね。それは今、全部この学習院の東洋文化研究所に入っています。

それで今それを業者に直してもらったのを、私が生き残りなんです、その研究会で。生き残っているのは私ともう一人、在日朝鮮の姜徳相さんがいるんですけども、その人ももう八十幾つぐらいでちょっともう、すっかりしていらっしやいますけれども。それでできるだけせっかくみんな一生懸命聞いたわけですから、その緒に当たった人です、支配の緒に当たった人に聞いています。これは穂積先生が朝鮮総督府に、東京帝国大学を出るとすぐに朝鮮総督府に入って、戦後は日本人世話会というのをつくって、日本人の引き揚げが終わるまで自分は朝鮮に残って、日本

人が全部引き揚げが終わるのを見届けてから帰ってこようと思つたらしいんですけども、途中で進駐軍に言われて、やむなくかなりおくれたんですけども、帰っていらつしやいました。今、ずっと日本にいて、今度私たちと一緒に研究会をやるようになったんですけども。ともかく私にはああいう立派な方も朝鮮にいたということが多少は慰めになっております。

そして、ずっとこの研究会も毎週毎週やっておりました。本当に毎週です。お正月と暮れの一週間ぐらいずつやらなかっただけで、ずっとやっていて、四〇〇回ぐらいまでやっていただけですね。そのうちに穂積先生が七〇年の五月に亡くなる。そしてだんだん、だんだん、私たちが話が聞きたい総督府の関係者もどんどん、どんどん亡くなっていってしまつて、そのうちにもともと私たちに好意を持っていない、特に在日朝鮮人の方はすごくあそこに行くのが嫌だったんじゃないかと思うんですけども、友邦協会のある丸の内の事務所には、「今まで誰も朝鮮人が来たことがないんだよ」なんて私に言うんですね。だから私なんかは「ああ、そうですか」と言っていればいいんですけども、やはり在日朝鮮人にすればそういうふうに言われるというのは、本当に余りいい気持ちじゃなかったと思うんですね。でも「この協会には朝鮮人は今まで来たことがないんだよ」だなんて平気で言う方とか、それから朝鮮人に撃たれたビ

ストルの弾がまだ体内に入っている警官とかというような人が、すごく嫌な顔をしたみたいな感じで。本当に穂積先生が亡くなると何かもともと私たちに好意を持っていな人たちも、一応そういうふうな穂積先生なんかの力のために黙っていた人が、だんだん大きくなってくるし、それに聞きたい人もほとんど聞いてしまったというふうなつもりがあるんですね。総督府の人たちについても。だから私たちがだんだん行かなくなつて、ついに研究会は消滅してしまつたようです。

それで今は、ちょうど一九五九年の一月三十一日に、朝鮮史研究会というのを明治大学の大学院で立ち上げました。それは大学の先生が、例えば都立大の旗田魏先生、それからこの学習院の末松保和先生、それから明治大学の青山公亮先生、そういう先生たちが集まつて、一つ朝鮮史の研究会をつくろうじゃないかと。それでつくつたわけなんです。それでその第一回の研究会は一九五九年、一月三十一日の日に、第一回の研究会を持って、それから毎月一回の研究会を現在までずっと続けております。

その幹事にはできるだけ会の組織のほうには力を使わないで、研究のほうに力を注ごうということでもつて、幹事会は最初は日本人二人、朝鮮人二人でやつたんですね。日本二人というのは武田幸男さんという方と、私、それから朝鮮人のほうは朴宗根という方と、それからもう一人徐台

洙、その四人でやっていました。それでやっていて、四年ぐらいたったときに朴宗根が「もう研究会を始めてから四年もたつ」と。「だからこの辺でそろそろ大会を持たないか」ということになったんですね。私はもちろん大賛成だったんですけれども、結局誰がやると言っても幹事が中心になってやるよりしようがないわけなので、またこれ以上忙しくなっちゃ、朝鮮近代史を勉強しているというのは本当に看板ばっかりで、実際何もやっていないんじゃないかと

いう反省が私にはすごくあったんですね。でもやっぱり研究会の大会は開かなきゃいけないということで、第一回の大会をやりました。この日がたしかケネディが暗殺された日だったんじゃないかと思うんですけども。みんながその日は明治の大学院の――明治の大学はすごくいい場所にあるまして、お茶の水を降りてちよつと歩くとすぐ建っているんですけど。だから非常に地理的にいいわけなので、ずっと最初のうちに一〇年間ぐらいは朝鮮史の研究会も大会も全部明治大学の大学院でお世話になっていたんですね。第一回の大会の日はたしかケネディが暗殺された日かなんかだったんじゃないかと思うんですよ。私の記憶が間違っていたらば申しわけございませんけれども、後で、ご自分で訂正なさっていただくことにいたしました。それでことはちよつと五一回の大会を京都でやりました。二年間は東京で、後の一年は京都のほうでと。そのうちにどんどん

どんどん大きくなりまして、関西部会もできました。関西部会は関西部会で研究会をやり、関東部会は関東部会で研究会をやり、年に一回大会をやるというふうな形で今のところ研究が進められているわけです。

話がだんだん変なほうになっちゃったかもしれませんが、そういうことで、今でも研究会はきちつと。朝鮮史研究会はたしか一九五九年だったかな、一月三十一日に創立会を開いて、その時に五〇名ぐらいの研究者が集まってやったという記憶は、私もそのとき参加していましたからありました。それで私なんかがあつちでもこつちでも、何しろ最初のうちはともかく一応私も女ですけども、女の人一人しかいないんですね。朝鮮史研究会には。だからどうしても目立つちゃうんですね、かなりおとなしくして、罷業していても。だからそれですごく大変だったんですけれども。

今、友邦協会のあの膨大な資料、実に帝国議会説明資料なんていう資料もちゃんとあるんですね。これは朝鮮総督の予算というのきちつと帝国議会に審査を受けるわけなんです。私もこの目のすぐ向こう側、学習院と反対のほうに行つたところに水田さんという「朝鮮で、昭和に入つてからの全部の予算と決算は全部自分がやった」というすごく東京帝国大学を銀時計で卒業したという方がいらっしゃるんですね、この目白に。もうお亡くなりになってい

と思うんですけども。私も二、三度その先生の家に話を伺いに行ったことがあるんです。水田先生は「総督府の予算は全部自分が、昭和に入つての二〇年の間は、全部自分が決算、予算をやった」というふうにおっしゃっていただきますね。だからその予算のことを聞きに行ったことがあるんです。「先生、どういうふうに朝鮮総督府の予算というのはおつくりになったんですか」とお聞きしたら、まず初夏から始まるんだそうですね。初夏になって全部各部署から予算の請求書を出してもらう。それが美濃紙で書いて、自分の背の高さぐらいになったと言うんですね。そしてそれを七・八・九の三カ月かかって克明に読んで、そして局長たちを集めて最終的に収支のバランスをとる。そしてそれを日本の大蔵省に持つていって、今度一〇・一一・一二と三カ月かけてやはり日本政府の査定を受けるんだそうですね。そして一月の帝国議会に朝鮮総督府予算案として提出すると言っていました。それで、「じゃあ、その帝国議会説明資料というのがどのくらいつくっていたんですか」と聞いたならば、水田先生は言下に「四部だ」、こうおっしゃっていました。それは政務総監用と財務局長用、それからそのおのおの予備。だから結局朝鮮総督府でもごくごく一部の入しか目に触れることがなかった。だからまさかこの資料が一般の人の目に触れることがあるなどということとは、自分は思ったこともなかった。だからすごく部数が少ない

から、全部焼却しちゃったと言うんですね。でも多少残っていたと。それは東京の国会にかけるために、審議にかけるために、属官なんかが持つてきて一生懸命読んでいたものがある。そういうのは焼却を免れていると。

それで今、日本の不二出版というのが帝国議会の説明資料を復刻しているんですね。それでたしか一九八二年から八年ぐらひにかけて、全一〇巻を復刻しています。それは韓国にあるもの、それから日本に、国会図書館に入っているもの、それから友邦協会じゃなくて、今は全部学習院に入っているはずなんですけれども、全部学習院が買つてくれました。だから学習院に入っているものが、全部が今あるものは全部集めて復刻してもやっぱりどうしても欠けているものが多いということだったんですね。これはやっぱりすごく一番貴重な資料じゃないかと思えます。特にそういったお米の問題とか、金の生産とか、そういうものについては特にいろんなものが入っているんじゃないかと思うんですけども。そういうふうに言っております。それで「どこが一番持つていた？」と私がその不二出版の社長さんに聞いたら、やはり友邦協会というか、今、だから学習院が一番それを持つていと言うんですね、原本を。帝国議会説明資料。だから本当はこういう資料を駆使して、日本の支配政策というものを本格的にどなたかすごく計数に明るい方が、日本の国家予算を検討するわけですから、

ちよつと自分のうちの家計簿なんかとはちよつと違うわけですよ。でも誰かがいずれ、この予算についてはきちつと分析していただきたいなというのが一つ私の希望。自分がやればいいんですけども、数字にすぐ弱いもんでして、自分のうちの家計簿もつけたことがないようなんで、国家予算なんてとんでもないことなんですけれども、でも本当はこういうところをきちつと分析することによつて、どこに力を入れるとか、どういうところにお金を使つていったかということがわかるし、一番これが一つの大事な資料じゃないかと思うんですね。それは不二出版から残っているものは全て、帝国議会説明資料という形で出ております。

それからもう一つ、渡辺忍資料というのがあるんですね。この渡辺忍さんという方は、ちよつと日本でも農村がすごく不景気になる時期がありましたね、一九三〇年代かなんかに。東北の若い女の子がみんな売られてきたりなんかする。そういうときに朝鮮のほうも本当に大変だったんですね。その時の農林局長をやつていたのが渡辺忍さんです。この渡辺忍さんという方は私はお会いしたことはないんですけども、新潟のほうの大変な大地主でもつて、駅から自分の家まで人の土地を歩かなくても行けるとか、よくそういう家があるらしいんですけども、田舎のほうに行くとか。そういうふうな大地主の方がちよつと一番困つたとき

の朝鮮の農林局長をやつていた。渡辺忍さんは戦前に総督府を退官なさつて、日本に帰つて、その資料がそっくり残つているはずだということなんです。ですからぜひこの資料なんか使つていただいて、ぜひ皆さんの中で「我こそは」と思う方がいらしたらば、ぜひこういう資料を駆使して、きちつとした論文でも何でも書いていただければ非常にありがたいと思います。渡辺忍さんについてはそういうことなんですけれども。

それから帝国議会説明資料については、今、言つたように、水田先生というのが財務局長、一九三七年からやつていらつしやいました。ですから、その三七年以後は割合に重要な文書が残つている、帝国議会の説明資料は多いんですけれども。あと三四年がどういうわけか一部割合たくさん残つている。でも後は全部焼却しちゃつていらっしゃるんですね。だから非常におしいと私は思つております。

それは、私も随分この友邦協会にあつた資料がどこに入るんだろうかということ、私と姜徳相さんと、梶村さんと三人ではたまによく話し合つていたんですね、「これがどこに入つちゃうんだろう」。私たちは、それは誰が所有しているかさえもはつきりわからなかつたんですね。例えば帝国議会説明資料なんて「どこにどうやつて持つていくのかしら」というのも何かちよつと聞きにくいような感じだつたんですね。でもそれが全部この学習院大学に入つた

んです。だから日本で、今、朝鮮近代史の資料を一番持っているのはこの学習院大学であろうと思うんですね。だからしっかりと勉強して、いい論文をぜひ発表していただきたいと思うんですね。この学習院大学は本当に全部買ってくれたんですね。

—そして友邦協会のほうも、この前ちよつと訪ねていったんですね。私ちよつと自分が司会をやったテープで聞きたいものがあつたから。ちよつと、今、古いビルが壊されて、八重洲口のほうのビルに入っているという事を聞いたもんですから、ちよつと行ったら、全く知らない方が二人いて、「このテープをお借りしたいんですね。どうぞ」と言ったら、「二〇〇〇円置いていけ」と言うんですね。何で私は自分が司会しているのに、二〇〇〇円……。でも知らないから、仕方がないから。「ちやんと返してくれたらば二〇〇〇円も返します」と。だからそういうふうに丁寧に扱って紛失されないようにしてくださいのは非常にありがたいと思つたんですね。何かその時つくづくこの資料は私の手からは完全に離れちゃったなというのが実感だつたんですね。そういうったテープも全部この学習院に入っていますでしょう。

何か全部入っているそうですから、ぜひ本当に日本中どこを探してもこれほどの資料を持っている大学はないと思うんですね。だからぜひこの方たちには頑張っていただ

きたい。それで助手の方初め、みんな必ず一人は助手の方が必ず朝鮮関係につけているみたいですね。というのは資料が膨大にあるからなんです。でも学習院というのはあんまり朝鮮関係と結びつかないんじゃないんですか。でも資料が入ったことによつて、近代史の資料も学習院以上に持っているところはないということがはっきりしているわけですから、どうぞ皆さんもぜひ大事にしてこの資料を活用していただきたいと思います。

一度きちつと資料なんかを読むと、やっぱりすごく違ってくるんですね。何か本当に歴史というのは生きた人間によつてつくられるんだなということが実感として非常によくわかるわけです。私もそういうふうに大体朝鮮総督の關係者の方、正確には一二人人にお目にかかっているいろいろ話を聞いているんですね。そういうふうに聞いたときに大体二つのタイプに分かれるんですね。一つは土着型官僚といえますか、朝鮮総督府の役人であつても、朝鮮にずっと根づいて、朝鮮で骨を埋めようという覚悟でやっている方と、それから内地志向型官僚というんですか（その当時日本のことを内地といっていた）、総督と一緒に朝鮮に行つて、総督と一緒に帰ってくる。だからちよつと土着型官僚から見れば無責任のような感じ。例えば創氏改名とか、あれなんかについては朝鮮人の名前を日本式に変えさせるといふ政策を一九四〇年か何かにやっているんです

ね。それについても、ほかの官僚の人たちは大体それは無理だつて、南さんも随分無理なことをやったなと言っていますけれども、南さんは単に塩原時三郎の言いなりになっていただけではないんですね。だからそういうふうな官僚の人たちについても、もっともつと緻密に分析していきなさいいけないんじゃないかなと、私はこれからの課題として思っています。

日本の朝鮮近代史研究はまだ緒についたばかりだと思います。何しろ三六年間支配したのに対して、非常に研究者が少ないんですね。本当に数えるぐらいしかないんですね。そして一向にあんまりふえない。だから何かやっぱり、どういうんでしょうね、ふえないのは。何か私は最初から一番大事な時期だと思っっているんです。長い朝鮮と日本との歴史を考える中で。朝鮮人にすればこれほど嫌なことはなかったと思うんですね。自分よりもちよつと目下に思っっているような、中国的な価値観から言えば、日本なんかどうしようもないような国と思っっている国に支配される、という屈辱感というものはやはりすごくあるんじゃないかと。でもそういうことも超えて、やっぱり嫌だからといって簡単に引越すわけにはいかないわけですよ。だからどうしても国土がある限り、永久に隣国であり続けなければならぬから、私は何とかして両国の関係がうまくいくようにしたい。そのためには自分たちの国がかつて植

民地として朝鮮にどのような支配をしたのか、その中で朝鮮の人たちは何を思っているふうな生活をしていたのかということを知ることが、きのう、きょうとかという短いスパンではなくて、これからもずつと隣であり続ける限り、やっぱりきちんとそのことは知っておくべきであらうと私は考えて一人で細々と勉強、余り勉強もしていないんですけども、やっているとわいわけなんです。

(了)

